

平成30年度機構評議会で委員から寄せられた主要な指摘事項とそれに対する対応方針

	項目	機構評議会における指摘事項	対応方針
1	研究課題の設定	今後、交付金も苦しくなってくる中で、こういう研究に重点化するなど、今後の方針はあるか。	現中長期計画では4つの重点的な目標を立て、研究開発に取り組んでいる。重点化に関わる行政や社会の動きとしては、国内では森林環境税や新たな森林管理システムの導入、国際的には持続可能な開発目標(SDGs)があり、これらの枠組みの中で研究成果を社会に還元することが今後の課題と考えている。
2	研究課題の設定	松枯れに関する研究では、林木育種センターと森林総合研究所とのシナジーが必要である。このような組織横断的な課題に、法人全体としてどのように取り組んでいく予定か。	東北地域のマツ枯れ研究における東北支所と東北育種場との協力、抵抗性に関するDNAマーカーの開発における森林生物遺伝子情報データベース(Forest GEN)の活用など、研究と育種の連携を支える態勢や環境が次第に整ってきた。組織横断的な課題については、今後も法人全体としてシナジー効果を発揮できるよう取組を続けていきたい。
3	研究課題の設定	大径材に関する研究において、森林総研にはリーダーシップを発揮してもらいたい。	大径材の利用については、農林水産技術会議が実施する「革新的技術開発・緊急展開事業」(うち先導プロジェクト)の中で「要求性能に応じた木材を提供するため、国産大径材丸太の強度から建築部材の強度を予測する技術の開発」(H28年度～H32年度)と題する研究プロジェクトを森林総合研究所が代表機関となり、建築研究所や地方公設試、大学、企業からなる研究コンソーシアムを形成して実施しているところであり、今後も研究の推進に尽力して参りたい。
4	研究課題の設定	長伐期の針広混交林化、育成複層林化など、いろいろな地域でいろいろな森林に導いていると思うが、どのように転換していくのかという研究と実証をしてもらいたい。	東西南北に広い日本において、気候帯や標高を鑑みて、あるべき森林の姿を考えていきたい。針広混交林化・育成複層林化への転換が試みられる森林には、拡大造林時代に造成された針葉樹人工林(育成単層林)も含まれ、50年生以上を経た育成単層林は地域の環境条件に適応してきた部分もある。生態系サービスを発揮できる森林として、目標林型に応じた時間的なスケールや、立地環境条件に配慮した転換技術を開発していく。また水源林造成事業が国立研究開発法人森林研究・整備機構法の本則に位置づけられたこともあり、森林整備センターにおける事業にもこうした視点を反映させながら研究と実証を行っていきたい。
5	研究課題の設定	木を一度に切って出し、気が付いたら植林も全部終わっていたというのは一番効率的で経費も安くなるので、一貫作業システムをさらによいものに改良するための研究を進めてほしい。	一貫作業システムは作業の連続性によって担保される施業システムであるが、同時に人間の行う作業として「次の作業を考えた今の作業」という意識が大変重要である。その意識は苗木の生産から下刈り作業まで続くべきであり、また一貫作業システムは間伐作業も含めた最終的な目標林型(森の使い方)に続く一連の計画の中で実行されなくてはならない。コスト削減だけを考えるのではなく、労働力不足への対応や作業の安全性、将来の森林の目標林型を考慮に入れた伐採一造林一保育システムの開発を行っていく。

6	研究課題の設定	<p>森林保険において森林組合の職員が現場に行って損害調査をするのだと思うが、林業家と会ういい機会であるし、せっかく森林保険センターが森林総研の人たちと一緒にやっているの、損害のことだけでなく、リスク管理などいろいろ、林業全般も含めて研修を行うことで、地域の技術力が高まり、林家の人も喜ぶのではないか。</p>	<p>森林保険センターでは、研究サイドからの助言や技術協力を生かしながら、業務の委託先となる県森連、森林組合職員を対象に例えばドローンの利用技術に関する研修を行っており好評を頂いている。また、林野庁が森林技術総合研修所で行っているドローンの講習についても、研究サイドから様々な形で協力しているところである。このように技術の進展が著しい分野もあることから、今後も中核となる林業技術者に対する、教育活動に対する助言を行っていきたい。</p>
7	教育・人材育成	<p>林業大学校のようなものが全県にかなりできている。そういう所との連携などこれから新たな視点での林業教育が必要だと思うが、どのように考えているか。また、少子化で労働力が不足していく中で、林業で働くことの魅力をもっと発信する必要があり、教育の問題が大きく関わっている。何らかのアクションをお願いしたい。</p>	<p>人材育成については、農業高校教師への林業教育カリキュラムの提案、林業大学校への講師派遣等の支援を行っている。人口減少社会を迎え、林業においても人材育成はますます重要な課題となるので、このような活動を今後も継続していきたい。研究開発においても、省力化や機械化による生産性を高め、林業収入の増大、作業強度の軽減、作業の快適性や安全性の向上を通じて、林業が魅力ある職業となるように成果を出し続けていきたい。</p>
8	人材育成	<p>現在、森林総合研究所内での女性管理職は5%程度である。女性の研究リーダーや研究管理者は、かなり戦略的に登用しない限り増えないのではないかと思います。この点、どのように取り組んでいるのか。</p>	<p>採用者及び管理職に占める女性の割合について、第4期中長期計画期間(2016年4月～2021年2月)における数値目標を定め取り組んでいる。かなり厳しい状況ではあるが、まずは管理職を魅力的なものにするとともに女性が管理職になりやすい環境をつくる必要があると考えている。長期的には、公正な評価に基づく女性の積極的採用および活用に努め、そこから将来的に管理職が生まれるような持続的な人材育成に取り組んで参りたい。</p>
9	広報・普及	<p>一般の市民が脱プラやSDGsに目を向けている時代なので、機関誌等で個々の研究とSDGsとの関係を示すなど、機構が脱プラやSDGsの情報をうまく取り込んだ方向性を出して、研究所としての存在意義をアピールしてはいかがか。</p>	<p>国連が進めるSDGsについては、当機構の行う研究開発、水源林造成、森林保険の各業務に関する取組が、SDGsのどの目標達成に貢献しているのか、ウェブや刊行物を通じて分かりやすくアピールすることを検討したい。また、国際的な取組が求められている脱プラスチック対策については、木質由来のリグニンやセルロースの生分解性を活かした新素材開発など脱プラスチックにつながる研究成果を引き続き積極的に情報発信して参りたい。</p>